

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	小泉 椋	指導教員 (主査)	渡邊 勉

論文題目	家族機能が内的作業モデルを通して青年期危機に及ぼす影響
------	------------------------------------

本文概要

【問題と目的】青年期とは 心理・身体的要因により均衡が崩れ心身が不安定になる時期である (安田, 2004)。このような青年期において, 母親に対する愛着の安全基地機能が残されること (若尾, 2001) が示唆されている。Bowlby (1976) は, 乳幼児期に養育者との間に培われる関係性としてアタッチメント理論を提唱し, アタッチメント理論は生涯にわたって継続する可能性があるという内的作業モデル (Internal Working Models: 以下 IWM) というモデル概念に発展した。IWM の形成には幼少期の養育が重要であるとされるが (山口, 2008), 青年において養育とは別の家族関係が影響を及ぼすと考えられる。そこで家族機能が青年の精神的健康に影響を及ぼすことが示唆されている (藤森・真栄城・八木下・菅原, 1998)。そこで, 家族機能の“凝集性”および“適応性”が高ければ, 内的作業モデルの“見捨てられ不安”および“親密性の回避”が低く, 青年期危機における発達の危機が低く, 適応的危機が低い, また, 家族機能の“凝集性”および“適応性”高ければ, 発達の危機が低いという仮説を立て, 家族機能が内的作業モデルを通して青年期危機に及ぼす影響のメカニズムを検討することを目的とした。【方法】大学生 291 名を調査対象とし, フェイスシート (性別, 年齢, 学年), 家族機能測定尺度 (20 項目, 草田・岡堂, 1993), 一般他者を想定した愛着スタイル尺度 (30 項目, 中尾・加藤, 2004), 青年期の自我発達上の危機状態尺度 A 水準 (53 項目, 長尾博, 1989)・青年期の自我発達上の危機状態尺度 B 水準 (24 項目, 長尾博, 1989) について回答を求めた。回答に不備のあるものを除き, 288 名 (男性 63 名, 女性 225 名, 平均年齢 19.25 歳, SD=2.23) を分析対象として検討を行った。【結果】共分散構造分析一般他者を想定した愛着スタイル尺度と家族機能測定尺度と青年期の自我発達上の危機状態尺度 A 水準と青年期の自我発達上の危機状態尺度 B 水準の各因子における共分散構造分析を行った結果, 本研究で仮説を立てた, 家族機能の“密着性”および“尊重性”から内的作業モデルの“見捨てられ不安”および“親密性の回避”への影響は認められなかった。一方で家族機能の“密着性”から青年期危機の“親密な他者の不在”に, “尊重性”から青年期危機の“精神・身体的反応”にそれぞれの負の影響が認められた。また, 内的作業モデルの“見捨てられ不安”から青年期危機のすべての因子へ正の影響が認められ, その中でも“親との葛藤と同一性拡散”への影響が 0.564 と最も強かった。内的作業モデルの“親密性の回避”は青年期危機の“親密な他者の不在”にのみ正の影響を及ぼしていた。【考察】岡島 (2010) は, 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化に恋人の応答性が関係することを明らかにしており, このことから親からの独立がテーマとなる青年期において, 青年にとって家族よりも恋人や友人などの他者が重要な意味を持つことが考えられる。家族機能と青年期危機家族機能の“密着性”から“親密な他者の不在”に影響が認められた。“密着性”は家族間の具体的な接触の機会, “親密な他者の不在”は他者との接触, 関係の質についての因子になっている。そのため, 家族成員間での接する機会が多さは, 自己開示ができるレベルの親密な対人関係を促進させることが分かった。鈴木 (1997) が, 親から自立するということは, 人の一生において大きな出来事であり, これは自我同一性の確立というテーマと合わせて, 青年期の人の心理的な発達課題であると指摘しているように, 青年期の重大なテーマとして親からの自立がある。しかし, 単純に家族との密着を避け, 距離を置くことが青年に危機的状態を緩和するのではなく, 家族間の密着もまた重要であることが示唆された。【主要な文献】数井みゆき・遠藤利彦 (編著) (2005). アタッチメント 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房